

総合科学技術・イノベーション会議有識者議員懇談会 [公開議題]

議事概要

- 日 時 令和6年10月17日(木) 9:58~10:50
- 場 所 中央合同庁舎第8号館6階623会議室
- 出席者 上山議員、伊藤議員、梶原議員、篠原議員、菅議員、光石議員、
波多野議員 (Web)
(事務局)
森総理補佐官、濱野事務局長、柿田統括官、塩崎事務局長補、
徳増審議官、藤吉審議官、岩渕参事官、有賀参事官、宇田川企画官、
宮澤企画官、加藤上席調査員、原府審 (Web)、小安文部科学大臣科学技
術顧問、大野経済産業大臣科学技術顧問
- 議題
 - ・第21回国際科学技術関係大臣会合について
 - ・スタートアップ・エコシステム拠点都市の現状と今後の方向性について

○ 議事概要

午前9時58分 開会

○岩渕参事官 それでは、始めさせていただきます。

それでは、お時間になりましたので、始めさせていただきます。

本日は、議題に入る前に、石破内閣におきましても引き続き総理補佐官として科学技術政策を担当されることになりました森補佐官が会場で御出席をされておりますので、一言御挨拶頂戴できればと思います。よろしく申し上げます。

○森総理補佐官 おはようございます。今回石破政権発足に当たりましても、同様に科学技術・イノベーション担当という形で補佐官を拝命いたしました森でございます。また引き続き御指導のほどよろしくお願い致します。

研究においては評価が大事だと思いますが、前回岸田政権の下で皆様方と御一緒させていただいた3年間の間に科学技術・イノベーションを担当させていただいたわけですが、先生方、委員の皆様方の御指導の下で大学改革を始め、SIPやBRIDGE、あるいはムーンショットなどの研究、色々なそれぞれの評価を御一緒にまた勉強させていただきました。

また、スタートアップに関連する施策も前進が見られてきているところでございます。またKプロ等に関しましても、先生方の御指導を頂きながら、政府としても一步一步進めてきたというように認識をしております。これが3年間の評価でございますので、これからもその歩みをとどめることなく、あるいはさらにまた加速できるよう各委員の御指導を頂きながらまた進めてまいります。

本日はこの後公務がございますので戻らせていただきますが、毎回この定例の会議は対面か、あるいはリモートでいつも参加をさせていただいておりますので、すぐさま対応できるように準備させていただいております。引き続きの御指導のほどよろしくお願い致します。

○岩渕参事官 森補佐官、どうもありがとうございました。

○岩渕参事官 それでは、議事に移らせていただきます。

本日は、公開議題は2件です。

初めに、先日京都で行われました第21回国際科学技術関係大臣会合についてでございます。司会進行は上山議員にてよろしくお願い致します。

○上山議員 最初に公開として、有識者議員懇談会を開催をさせていただきます。

今お話ありましたように、第21回の国際科学技術関係大臣会合についてでございます。内閣府から、宮澤企画官、御説明をお願いします。

○宮澤企画官 国際担当グループ企画官の宮澤です。昨年に引き続き、国際科学技術関係大臣会合の御報告をさせていただきます。

この会合ですが、毎年京都でSTSフォーラムが行われていまして、そのセッションの一つとして同時に開催をしているものでございます。

STSフォーラムは21回目になりますが、その第1回目開催のときからこの科学技術大臣会合も開催しており、同じく21回目の開催になります。

この大臣会合ですが、大臣会合というとG7やG20といったような枠組みございますが、それらの規模を超えて、地理的にも文化的にも多様な国々の大臣クラスまたは科学技術顧問、アドバイザーのような方に参加していただいている大規模なものでございます。

正式な参加国としては約20か国、大臣や科学技術顧問が来られない国々はオブザーバーとして参加してもらいましたが、合わせて約40か国ぐらい、欧米のみならず、東南アジア、中東、アフリカ、中米といった国々も参加していただきました。

本会合の意義ですが、第1回目が始まった20年ぐらい前は、各国の科学技術政策の動向や情報を共有してネットワークを図ること、我が国と参加した国が、また、その参加した国同士

でネットワークを図るといったことが主な目的だったと理解しています。その目的は今も続いているというように思っています。

一方で、いまや国際的に人材獲得競争が熾烈になってきていて、こういった新興国にも参加していただいている会議ですので、当然我が国としても価値観を共有する国のみならず、ゆくゆくはそうした新興国からも人材を呼び込みたいと、また、日本で経験を積んでもらって戻ってもらいたいというところがございますので、こういった会議を日本の発信の場として活用するというのも有益なものになってきているというふうに思っています。

今年のテーマですが、「イノベーション・エコシステムと科学技術政策の深化」ということで設定いたしました。新興国や、文化的にも地域的にも多様な国が参加しておりますので、各国に対しても共通に議論できる話題にするということと、我が国にとっては第7期基本計画を策定した後に、毎年統合イノベーション戦略作っておりますが、2022年の統合イノベーション戦略から三つの基軸ということをやっております。

一つは、先端科学技術の戦略的推進。ふたつめは、知の基盤と人材育成の強化。もう一つの柱がイノベーション・エコシステムの形成ということでございまして、今年は我が国にとっても重要なイノベーション・エコシステム、各国にとっても恐らく同様に重要と考えているイノベーション・エコシステムというものを議題にさせていただいたというところでございます。

今回、就任直後でございましたが、科学技術政策担当大臣に就任されました城内大臣にも参加していただきまして、開会と閉会の挨拶をしていただいております。また、昨年同様に、上山議員に司会進行と議論の総括をしていただいたということでございます。

冒頭、我が国からこのテーマ設定に至った背景を、これは第6期の科学技術基本計画の問題意識のところにも書いておりますが、我が国としても世界にはばたくスタートアップを創出するイノベーション・エコシステムがまだ十分ではないというようなことが基本計画でも指摘されているところでございまして、それに対して今までスタートアップ・エコシステム拠点形成でありますとか、最近ではグローバルスタートアップキャンパス、そういったもの、あと様々な取組を通じてイノベーション・エコシステムの推進に努めてきているということを発言し、そうした中で各国においてもその革新的なスタートアップの創出を含めてイノベーション・エコシステム形成発展させるためにはどういった課題があって、何が必要なのかということをお願いかけて、その後、各国から発言を頂いたというものでございます。

この後、各国からどういう発言があったかというのを簡単に紹介いたしたいと思いますが、このSTSフォーラムにはいろんなセッションがございますが、基本的にはクローズで行われ

ているということで、チャタムハウスルールというルールが使われております。これは「誰が何を言ったか」ということに対して、「誰が」というところについては後々明らかにしないようにしよう、ということによって自由闊達な意見交換ができるようにしようというルールの下で行っておりますので、この後に、こういう意見がありましたということを紹介致しますが、国名については控えさせていただこうと思います。

先ほどのテーマの下でいろんな国から意見が出てきておりました。イノベーション・エコシステム推進のためには、ディープテックの研究開発の推進が必要であろうということで、例えばAI、量子、バイオについては個別に戦略を立てていると。それぞれの分野については是非とも日本と連携をしたいといったような国がございました。ある国では、もちろん起業家の育成には力を入れていると、ただそれは高校生でさえ起業できるといったような教育を今し始めているところだと、若い力によってスタートアップを創出したいといったような取組をしているという国ございました。

ある国は、イノベーション・エコシステムを回していくためには、研究セキュリティとオープンサイエンス、これを同時に考えていくことが必要であろうと。そういった意味でオープンサイエンス戦略を策定したというところ。それに合わせて、今度は研究セキュリティ戦略といったものを作っていかなきゃいけないということ。

あとは、技術やお金があるだけでは駄目で、顧客が大事であり、顧客が一番の教師になりますということ。ここで政府が最初の顧客になれるということも十分に考えなきゃいけないだろうといった意見もございました。

ある国では、イノベーション・エコシステムの新しいガイドラインについて議会にも今話しているところだと。そのガイドラインの中では研究とイノベーションが経済の中核になるものだと、そういう位置づけにしていると。スタートアップは国際的にスケールアップをしなければいけない。一方で、イノベーションを起こすためには基礎研究が重要であり、それを優先的に実施しているという国もございました。

あとは、新しいサービスは色々あるが、技術があるからできるのではなく、経済や規制、社会的な側面を包含して成立するというのを考えなきゃいけないと。そういった意味で日本が提唱しているSociety 5.0といったものは非常に参考になると。社会科学、人文学を含めてその技術をどう生かしていくか、社会に生かしていくかということを考えていかなきゃいけないということで、Society 5.0というのは大変参考になるといったようなお話もありました。

あと、ノウハウがあっても事業化できないと駄目ということで、研究者とビジネス界のリーダーが会える機会の創出というものを多く作るということにも尽力しているといったような国もございました。

あとは、起業家精神です。イノベーションの文化、そういったものを根付かせるために、やはり教育が重要であるといったような意見もございました。

また、ほかにも全体的な機運としては、AIでありますとか量子についてはいまや倫理的なものも併せて議論が必要であるといったようなお話ありました。また、全体的に起業家、デジタルリテラシーといったものについては、やはり教育が占める部分も非常に重要であるといったような意見がございました。

結果概要ということでペーパーには簡単にまとめていますが、具体的にはこういった意見が出たということでございます。

最後になりますが、本年も上山議員に会議を進めてもらって、最後に総括をしてもらったということでございまして、改めて上山議員にも感謝申し上げます。

私からは以上になります。

○上山議員 ありがとうございます。

私はもう7回目なので、コロナのときはオンラインでしかできなかったんですが、対面でやるのは久しぶりという感じがいたしました。1か国当たり2分程度のタイムでやると時間がかかり余ったので、あとはフリーなディスカッションにして、皆さんの闊達な御意見を聞いて終わったということで、今宮澤さんがまとめてくださったような様々な意見がありました。

これに関して何か御質問とか、あるいは何かございましたら。如何ですか。では、篠原議員。

○篠原議員 イノベーション・エコシステムというふうに言うと、国によっては国の中でエコシステムが閉じ切る国と、やっぱり産業とかいろんな経済の状況を考えるときに、国がまたいで協力していかなきゃいけないみたいな国というのがあると思うんですが。それで、その国の間でのエコシステムを作っていく上での何か連携を模索するような、そんな意見というのはあったんですか。

○宮澤企画官 この会議の場でどこの国と連携をしたいということはなかったですが、やはりスタートアップをスケールアップしなきゃいけないということは各国とも思っていて、例えばそれを国際連携の上でスケールアップをしなければいけないという問題意識は何か国かお持ちだったと、そういう意見は出てきておりました。

○上山議員 自由討議のときに、これはもう手を挙げてどうぞという感じだったんですが、国

によってもっと何かやりたいとか、何か国かは今おっしゃったみたいな国とある程度の協力関係の中でこのエコシステムを何とかしたいという発言は、国の名前は言えませんが、5、6か国ありました。

○篠原議員 私も昔イスラエルと話をしているときに、彼らスタートアップに強みがあるという自負がありますから、スタートアップは任せてほしいと。ただ、スケールアップは自分たちやはり弱いので日本に期待するようなことを、結構真顔で言ってました。だから、その辺の分野によってはそういうグローバルな連携というのも大事です。

○上山議員 梶原議員、どうぞ。

○梶原議員 今グローバル連携をどう見ていくかという話で、必要性について何か国かの方がおっしゃっていたということですが、逆に、どんどん進めていますというようなことは出てきていないのでしょうか。やはりこれからの話題として、ということなのでしょうか。

○上山議員 グローバルなことを詰めていく。

○梶原議員 いえ、もう既に連携を進めていてその先を行っているような話題です。グローバルから参加されグローバルサウス、アジアの方とか多くいらっしゃいますが、これからの課題感としてなのか、もう既に行っている上で、ということなのか。

○上山議員 この会合は年によって違うんですが、割とヨーロッパの国とかアメリカの国が多いときと、最近はグローバルサウス系の国が多くて、この間のときはイタリアとかドイツ、イギリス、そのあたりの国は当然ながらやっているということですし。ほかの国々のところでいうと、さっき宮澤さんがおっしゃったみたいに、政府の役割、政府が具体的に市場を作っていくという、いわゆる政府調達みたいなことですね、そういうこともやっぱりやっていかなければいけないという意味では、とても重要な問題だが、ほかの国々でやられていることを見ながら我々もそれについてキャッチアップしたいと、そういう空気感がいわゆる先進国とは違うところについて。

○小安文科大臣科学技術顧問 小安です。

最近ASEANと日本との関係というのが非常に重要視されていると思います。出席された会合にもASEAN諸国の方がいらっしゃったと思いますが、ASEANとしてこういう会合に参加するような計画や予定はないのでしょうか。

○宮澤企画官 いわゆる国際機関としてのASEANとして参加をするということは今までは考えてなかったですが、また来年以降、そういった観点も含めて検討したいと思います。

○上山議員 ASEANの問題は多分どこかでここで話しすることもいいかなとは思いますが

が、いわゆる科学技術のラインと経済協力の、経産省でやってるラインと二つあるような気がして、それは多分対ASEANについてはどこかでその二つをどうするのかみたいな話が出てくると思うんですが。この間のときには、ASEANとしてという発言は余りなかった。

○小安文科大臣科学技術顧問 上山先生と一緒に参加したOECDの会議でもASEANとしての議論がされていましたが、今後重要になってくると感じています。

○上山議員 それでは、基本的には今詳しい報告を宮澤さんからいただきましたので、大体の雰囲気はつかめていただいたんだと思います。

それでは、この第21回国際科学技術関係大臣会合についての御報告と御質問というセッションを終わらせていただきます。

どうもありがとうございました。

○上山議員 では、次の公開の議題は、スタートアップ・エコシステム拠点都市の現状と今後の方向性についてでございます。

スタートアップ・エコシステム拠点都市については、文部科学省、経産省と連携して世界に伍するスタートアップ・エコシステム形成を促進すべく、その拠点となる都市を2020年に選定し、支援を行っております。このたび、今年度末で選定から5年を迎えることから、スタートアップ・エコシステム拠点都市の現状と今後の方向性について検討を進めておりましたところ、進捗状況につきまして御報告いただくことになりました。事務局の考え方について、忌憚のない御意見を頂けると幸いです。

それでは、有賀参事官からよろしく申し上げます。

○有賀参事官 イノベーション推進グループの有賀です。資料に基づき御説明いたします。

1ページを御覧ください。2019年6月に内閣府が経済産業省、文部科学省と共に、世界に伍するスタートアップ・エコシステム拠点形成戦略を策定いたしまして、スライドにある7つの戦略を推進してきているところでございます。

本スライドの戦略2にあるように、大学の研究成果を基にした起業を促し、これを基に、戦略1にあるように、拠点都市による産官学金が参画するエコシステムの形成を目指し、国としてはアクセラレーションプログラムやギャップファンド、公共調達の獲得、ネットワーク形成などの支援を行ってきているところです。

国はこの戦略に基づきまして、エコシステム拠点都市として、2020年4月に8都市を選定しております。

スライド2を御覧ください。このスライドは2020年にスタートアップ・エコシステム拠

点都市として選定された8都市の概要をまとめたものです。①から④にございますのが東京コンソーシアム、Central Japanコンソーシアム、京阪神のコンソーシアム、福岡コンソーシアムという四つのグローバル拠点都市というものでございまして、これらに準じて下の⑤から⑧にありますように、札幌・北海道、仙台、広島地域、北九州市という四つの、こちら推進拠点都市というものを選定してございます。

これら各都市はそれぞれ5年間達成目標として独自のKPIを含む拠点都市の形成計画を策定いたしまして、これに基づいて様々な取組を進めてきております。本年はその最終年度に当たるといふことで、議員の皆様にご報告したいと思っております。

次のスライド3を御覧ください。こちらは各拠点都市が設定したKPIの達成状況や、それぞれが実施してきた取組を1枚にまとめたものでございます。上の表は5年間のKPIのうち、4年目が終わった時点でのデータによるものでございますが、例えば東京は海外の評価機関におけるランキング、それから中部では起業を志す人材、京阪神ではスタートアップの創出数、福岡でもスタートアップビザ、こういった数字がそれぞれ目標以上に達成するなど、グローバル拠点都市で大きな進展があるところでございます。

また、真ん中の推進拠点都市におきましても、それぞれが目標達成をしたか、または目標達成が見込まれる、こういった状況にございまして、それぞれにおいてエコシステムの形成が進んできているというように考えられます。

そして、下の表のように、各都市ではベストプラクティスともいえる様々な取組が行われておりまして、グローバルな観点でいえば、ピッチコンテストや国際カンファレンスの開催、広域連携では都市の枠を超えた連携協定の締結や、拠点都市外への支援プログラムの提供。そして、オープンイノベーションの上ではものづくり企業の技術とスタートアップのアイデアの融合。そして、アントレプレナーシップ教育では、小学生から大学生まで幅広い層の人材育成が行われているということが分かるかと思っております。

これらの取組の詳細につきましては、次の4ページから7ページで紹介されておりますので、ここでは時間の関係で説明は省略させていただきます。

スライド8を御覧いただければと思います。拠点都市の形成に関しましては、多くの指標で進展が見られておりますが、ここで国際的なスタートアップ・エコシステムの評価を行っているスタートアップゲノム社の最新の報告を御紹介したいと思います。

まず、左の図の全体のランキングにおきましては、御覧のとおり、東京が世界10位にランク付けされるということで、これは成果というふうに考えております。

他方で、右の棒グラフを御覧いただきますと、地域ごとにランキング40位以内のエコシステムの数をカウントしたものがございます。米国の都市数は飛び抜けておりますが、あとは人口規模の大きい中国やインドも複数都市入っているという状況です。日本はこのイーストアジアの中の一つということで東京が入っております。

ここで注目したいのは、カナダやオーストラリアのように人口規模とか経済規模でいうと日本の数分の1にもかかわらず複数のエコシステムが存在するという点です。日本はその人口や市場規模、技術力などを考えた場合、より多くの都市がランキング上位に位置づけられる、そういった潜在力があるんじゃないかというふうに考えます。

このランキングは、下にある評価指標で重みづけがされておまして、その分析を次のスライドで御覧いただきたいと思います。スライド9を御覧ください。こちらはアジアの3都市についての状況を比較したものでございます。左の五角形の図は、それぞれ先ほどのランキングの要素について3都市を比較したものでございまして、東京は知識や国内市場規模という点では優れているものの、資金調達や出口に課題があるということがうかがえるかと思えます。これらを実際のスケールで比較した右の棒グラフの方でもその差ははっきりと分かるかと思えます。

そして、次のスライド10を御覧ください。こちらのスライドは、スタートアップの数の伸び、それから資金調達の伸びというものを比較したものでございます。左の図は日本の大学発スタートアップ数を暦年で集計しましたもので、この10年ほどの間に数倍に大きく伸びているということが分かるかと思えます。

右のグラフは、大学発スタートアップに限ったものではございませんが、スタートアップによる資金調達額を示したものでございまして、その伸びは2013年から非常に大きく伸びているんですが、近年特に23年の辺りですね、については鈍化しているとか減少もしているというのが実態としてございます。こういった資金調達の現状があるところを御紹介いたしました。

次のスライドを御覧ください。さて、こうしたデータを基に現状分析したのがこちらのスライドでございます。まず、達成できている点といたしましては、大学発を含むスタートアップの数でありますとか、行政課題解決プロジェクトの創出数、それから各都市のエコシステム内のつながり、こういったものについては右の三角形にもございますが、底辺のベースとなる部分については拡大しているのではないかというように考えます。

一方で、発展途上というふうに考えておりますのは、この三角形の高さの部分、グローバル

に成長するような稼げるスタートアップが創出できていないという点にあるのではないかと
いうように考えています。これは投資などの面で海外のスタートアップ・エコシステムとの間の
つながりが十分に構築できていないのではないかとというのが我々の分析でございます。すなわ
ち、今後拠点都市が更なる価値を生むエコシステムとなるためには、グローバル水準の都市エ
コシステムへ引き上げていく、こういったことが重要であるというように考えております。

次のスライド12を御覧ください。そこで、今後拠点都市が何を進めていくべきか、その論
点を我々事務方の方で検討しているものがこちらのスライドでございます。

まず、(1)でございますが、拠点都市がより高い価値を生み出していく、三角形の高さを
出していくためには、一つとしては各エコシステムがグローバル展開を推進していくこと。そ
れから、スタートアップが企業や大学との競争、いわゆるオープンイノベーションを進めてい
くということ。それから、3番目に、国や自治体が公共調達までつながるような取組を充実さ
せていくこと、こういった点が高さのために必要ではないかというふうに考えております。

そして、(2)といたしまして、このエコシステムを成熟させ、さらに持続できていくもの
でないとエコシステムとは言えないと思っております、そのためには何が必要かと考えます
と、④として引き続きアントレ教育を進めるということも重要ですし、それから⑤としてそれ
ぞれのエコシステムが持続できるために、最適なエコシステム内でのコンソーシアムの形態で
すね、こういったアライアンスを組んでいくべきか、こういった考え方について見直すことが
重要と考えます。

そして、⑥でございますように、省庁や拠点都市を超えた、これは都市の中だけではなくて、
横のつながり、これを一層構築していくことが重要であるというふうに考えております。

そして、海外に対しては日本全体で一致協力することが重要と考えておまして、(3)に
ございますように、世界に向けて日本が団結した形での広報発信をしていくと、こういった点
も重要かというように考えております。

こうした論点について、私もう一ページございますが、その後で先生方の御議論いただけれ
ばというように思っております。

スライド13、最後に御説明いたします。こちら内閣府では各拠点都市間、それから省庁間
のスタートアップ現場担当者の交流を深めるため、今年の夏からStartup City
Project Network、SCP Nという取組を開始しております。本取組はエコシ
ステムの現場の担当者がワークショップ形式でエコシステムの課題を共有し、共に解決を試み
たり、拠点都市の枠を超えて人脈形成をして、更には日本全体のエコシステムについて考えて

いただく機会にできればというふうを考えているところです。

これまでのところ取組開始の話題として、今後の拠点都市の在り方について取り上げているところです。具体的には、これまで総論のほかに、グローバル展開の促進の在り方、持続的なエコシステムの在り方について取り上げまして、様々な意見交換をしていただいています。こうした取組において得られる情報は、国としても今後のエコシステム拠点都市の形成に向けた検討に活用したいと、このように考えております。

以降のスライドにつきましては、参考資料ですので説明は省略させていただきます。

本日は一つ前のこの12ページの論点、これは事務的にまとめたものでございますが、これも御参考に頂きながら、今後のスタートアップ・エコシステム拠点都市の形成の在り方について御意見いただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○上山議員 御説明ありがとうございました。

ちょうど4年半ぐらいになりまして、順調に進んでいるということで、当初の目的は果たしつつあるとは思いますが、それでもまだまだ問題点が今御指摘いただいたようにあるということでございます。

御質問あるいは論点などございましたら、どうぞお手をお挙げください。まず、大野先生、伊藤議員、それから光石議員、よろしく申し上げます。

○大野経産大臣科学技術顧問 御説明ありがとうございます。

非常に裾野が広がっているということ、我々の都市でも実感できると思います。仙台市が英語で海外に最終的に20人ぐらい送るというプログラムを作って、そこに300人、高校生も含めて応募があったりして、裾野が非常に広がったということを実感している次第です。

質問としては、より高い価値を生み出すということで、これまでの説明ですと比較的早期にIPOをする、してしまうというそういうプラクティスがあるので、それをM&Aベースなのか、もっと大きくする仕組みを作らなければいけないということが言われていたましたが、それが今どんな状況なのか、政府もそういう理解でよろしいのかどうかということが1点と。

グローバルに展開するためには、例えば国際特許などが必要なわけですが、そういうものはサポートがないとなかなかできないという切実な声も幾つも上がってきているので、そういう仕組みが既にあるのか、あるいは今後そういうものを検討すべきなのか、その2点について伺いさせていただきます。

○有賀参事官 お答えいたします。

まず、より高みということで、IPOだと金額が小さな形の出口になってしまうのではない

か、これは比較的スタートアップ業界の中では共有された認識であるというように考えております。

その点で、そこをうまくもう少しM&Aに行くようにという点につきましては、我々の論点として挙げさせていただいた、オープンイノベーション、大企業とか中小企業とかと一緒に協働することで、そこでマネーにつながるような形ができないかというところは重要な点だと思っておりますし。そのほかにもM&Aを推進するようなエコシステムの在り方というものは、自治体の方とも相談しながら考えていきたいというように思います。

もう一点、国際特許の件につきましては、これは確かに非常に高いというところは研究者の方々からもお伺いしているところがございます。一部国の補助みたいなものがあるとは思いますが、そこを我々内閣府というよりはそれぞれの省庁でやられているところもありますので、その点についてはどういったことができるかというところは各省庁とも相談をしてみたいというように思います。

○上山議員 御指摘いただいたようなことは全体の会合のところでも相当色々な、それぞれの取組の中から出て、一応共有しようとする形は進んできているなというように思います。

○大野経産大臣科学技術顧問 是非M&Aを進めるという方向性は聞いていますが、ベンチャーキャピタルのある種早くIPOを回収したいというそういうある種のプラクティスをどういうふうに変えていくのかということもお考えいただければと思います。

以上です。

○上山議員 ありがとうございます。

では、伊藤議員、どうぞ。

○伊藤議員 私も大野先生のおっしゃった、どうやってM&Aというイグジットを進めていくかというのが、そのためにはやはりこの12ページのところで、どうやって国際的な世界との連携をするか、どうやって世界のベンチャーキャピタルが入ってくるかというのが結構大きなポイントになってくると思います。

このエコシステム拠点都市形成等により、若者たちの考え方が本当に変わってきていると私実感しています。今までは安定的な企業に入るとというのが一番だと思っていたんですが、こういうような仲間、そこにまたメンターとしてこれまで少なくとも日本のスタートアップで成功した40代ぐらいの人たちがすごく応援をしてメンターとして入ってきているので、チャレンジして、もしうまくいかなくても誰かまた助けてくれて、次のチャンスがあるという、駄目だったらもうおしまいだという、セーフティネットがなかった状態なのが、気持ち的にみんなセー

フティネットが仲間同志が助けてくれるという雰囲気が出てるといふのを実感しているんです。

だからこそ、次どういう形で世界のベンチャーキャピタル網が日本に入ってきてくれるのかというのがポイントだと思っているので、今後の検討の論点としては、そののところをできるだけネットワークを広げて日本に来てもらうようなことをしてもらいたいと思います。

ちょうど先々週でしたかね、STSの翌日に私もアンロックジャパンという世界からのベンチャーキャピタリストが集まっている会議で私も日本の大学が変わっているという話をしてくれとやってやったところなんです、やはりそういうふうにならば日本にベンチャーキャピタルが世界から来たいと言っているのがもう実感している。でも、その人たちが結局日本に来てイベントに参加して終わってしまったというのだと非常にならばしてしまふところがあるようなので、その辺のところのつなぎをこれからシステムとして政府が作っていくといいかなと思います。

○上山議員 アクセラレーションプログラムでもベンチャーキャピタルにつながる、政策的にもやっておられるから、宇田川さんとか、どちらでもいいのですが。

○有賀参事官 ありがとうございます。

そうですね、今上山議員から御紹介ありました、我々この都市に限っているわけじゃないんですが、国として海外のアクセラレーションプログラム、例えば昔であればC I Cであったりとか、あとテックスターズとか、こういったところに日本に来ていただいて、日本のスタートアップをセレクトして、そこにアクセラレーションプログラムを提供すると共に、出口ではインベストも含めて実施していただく、こういったプログラムを最近増やしてきているところ。こういった形で海外のアクセラレーターの方々とか、あとベンチャーキャピタルにも日本にはいいシーズがあると、将来性というところをまずはお試しで見ていただいた上で、それで更に本格的に投資いただくと、こういったところも我々としても進めていきたいと思ふ。

こういったことを各自治体が海外のVC呼んでくるってなかなか、それぞれ努力しているんですが、なかなか難しいところがあるので、そこをやっばりいかに今皆さんが、日本がある意味安いと言われているところで、投資機会だと、リターンが高いだろうというところをうまくとらまえて呼んでくれるように、そこは様々な対応を考えてみたいと思ふ。

○上山議員 アクセラレーションプログラムは15億円使って、多方面で、今日の話とは連動させるような感じで事務局が動いてくださるといふことだと存じます。

では、次は光石議員、どうぞ。

○光石議員 幾つかあります。K P I の設定について、これは始まったときに各自治体が独自に自分たちで決めたものでしょうか、それともどこかで承認されたものなのでしょうか。

二つ目は、9枚目で、北京、ソウル、東京で比べていて、ファンディングは明らかに東京は低く、北京はもっと低いのでしょうか。かたやタレントとかエクスペリエンスを見たときに、実感としてこんな状況かなという気がします。これは、例えば、11枚目のスライドで、横で伸ばすという箇所に効くのか、あるいは縦に伸ばすという箇所に効くのか、その辺の考察はどうでしょうか。

最後の質問は、13枚目で、プロジェクトネットワークをみていますが、これの効果がどうであったのかということをお教えいただければと思います。

以上、3点、よろしくお願ひします。

○有賀参事官 お答えいたします。

まず、K P I は独自かというところがございますが、これは独自に設定いただいています。当時の考え方としては、自治体ごとにエコシステムの対応が異なるだろうということで、かつもともと持っている産業とか経済とかの仕組みも違う中で、どういうK P I を置くことが一番そのエコシステムの成長に適しているかという観点で設定いただいているというように理解しております。そこがまず1点目の御回答です。

2点目が、縦横の部分でございます。確かに9ページの数字の中でT a l e n t & E x p e r i e n c e、これは前のページに8ページの方にこれは何かというと、スケールアップの経験とかスタートアップの経験とかテック人材がいるかというところで、やはりある程度スケールアップとかがないと広がってこないという意味では、高さが出てくると横も伸びるみたいなそういう関係にあるのかなというように考えております。

縦横というのは我々がイメージ的に御用意したもので、これはベースとしては持つておくものは横というふうに考えていまして、上の方はもっとそれを大きく見せるにはどうするかという部分で、やっぱりファンディングであるとか、あとイグジットとか、そういったところを高さというイメージとして持つております。

それから、13ページ目のS C P Nでございますが、これは参加者の方々から好評でございまして、やはりこれまで都市の中、エコシステムの中で考えていたものが、実はほかの都市ではもう既にやられていたとか、こういう工夫があったということがまず学べるということもありますし、あとは様々な都市が例えば外部のサービスを使うときに、この外部のサービス

はいいですよというふうに特定の方から言われたとしても、本当かなと悩んだときに、ほかの都市の方に聞いて、本当にそれよかったのかというところを参考にしたりというところは、やっぱりロコミじゃないと伝わらない部分もあったりして、そういった部分をネットワークができる中で活用できるという部分であるとか。

あとは都市間連携として、先ほども例として挙げましたが、北海道と渋谷区の間では、例えば渋谷区だとドローンを飛ばすときに場所がないんですが、北海道であればできるといったときにその場をお借りする、そういった連携も進んだりとか。ここは好評だというふうに理解しております。

○光石議員 ありがとうございます。

1番目のKPIについて、各自治体が出したときに、それを多少修正をさせたのでしょうか、それともそのままなのでしょうか。

○宇田川企画官 恐れ入ります。

当初の計画、御提出いただいた際に色々と審査委員会の方で精査させていただきまして、もちろん計画として選定する以上、足りてない部分、また満ちてる部分、またエリアなどについても選定委員会の委員の皆様から御指導を個別にさせていただいたことは事実です。

○光石議員 ありがとうございます。

○上山議員 梶原議員、どうぞ。

○梶原議員 同じ箇所の問題です。9ページ、韓国のファンディングはやはりグローバルから非常に多いという試算になるのでしょうか。中国がゼロなのは、何故そういう数字なのかというのはやはり気になりました。

今後どう進めていくかですが、先の議題でもグローバルとの連携が必要だというお話が出ていました。当初KPI設定をするときに、共通的に同じKPIを持って進める世界ではなかったと思います。今後は何らかグローバルを意識するということで、意図的にやるのであればそういう戦略に沿った統一的なKPIを持った方がいいように思います。さて、グローバルに価値を上げるというときに、どういうKPIがよいのだろうかというのはやはり議論があると思いつつ、菅議員あたり、その辺ご知見があるのではなかろうかと思うと、御意見伺いたいと思います。

また、例えば先ほどの韓国で数字が高いと評価されているところはこういったことなのかというのも参考になるかもしれません。

○有賀参事官 まず1点目、韓国について、エコシステムバリューであるとかイグジットバリ

ューが高いというところは、おっしゃるとおり外国とのつながりの部分だと思います。彼らの成長源についてもやっぱり外国にいるということは大きく影響しているところございますし、そもそも国の市場規模がそれなりに大きく、まずは国内市場を重視する日本に比べると、韓国でも遅いという意見もございますが、日本よりはまだ進んでいるという側面もあるのではないかとこのように理解しています。

2点目のKPIのグローバルについては正に悩ましいところございまして、余り近い簡単、近いというのはアウトカムのなのかアウトプットのなのか、どの辺に置くのが最終的にエコシステムのインセンティブづけができるかというところが我々も悩ましいところございまして、まさにどういったものがいいのかというところは、アドバイス頂けると大変有り難いというふうには思っております。

これは実はこのパフォーマンスは真ん中が6となっていて、これが、スケーリングの問題で、ゼロではないと。

○上山議員 菅議員、どうぞ。

○菅議員 ありがとうございます。

今スタートアップ企業が非常に増えてきているというのは非常に喜ばしいことだと思う一方で、日本のベンチャーキャピタルからの投資というのはそんなに増えていない。要は日本の国の経済的な伸びが少ない分、やはりベンチャーキャピタルの方にお金が行ってないと思うんですが。

結局どこからか投資を得ようと思うとアメリカということになるんですが、私が色々アメリカのベンチャーキャピタルの人たちと話をする限り、アメリカのベンチャーキャピタルはアメリカで上場してもらわないと投資しないと、ものすごく明確に言います。というのは、日本で上場しても、例えばITとかAIとか日本国内でサービスのことをやっている会社というのは上場しても100億円ぐらいの時価総額しか生まれませんが、多くの企業はそれ以下の時価総額です。その代わり短期で上場するので、国内のベンチャーキャピタルは投資しやすい。ただ、海外の投資はやはり100億円の時価総額では全く駄目で、1,000億以上というのが当たり前の状態で、海外VCはそれが見えない限りは彼らは投資しないというスタンスなんです。

なので、やはりここでうれしい、うれしいと言ってるだけじゃなくて、これから次の投資を呼び込んでいくためにはどこに注力すべきか。例えばITとかAIという小ぶりの会社たちは国内でのエコシステム出来上がっていると思います。グローバル企業として躍進するエコシ

システムができてないディープテック分野がたくさんある、例えば材料とか、環境もそうかもしれませんし、バイオなんてもう全然できていないという状況です。そのあたりをもう少しエコシステムを作っている各都市の人たちにもう少し深掘りしてもらって、こういう分野ではエコシステムできてるが、こういう分野はできてませんよねというものはっきりしないと、全部おしなべて、はいはい、どうのこうのという議論をしていると、多分日本は全然伸びていかないとと思うんですが。

非常にやはり重要なのは、これからスタートアップ・エコシステムが各セクターで、分野でしっかりと成長していくという形のものを見なくちゃいけないので、そこに少し注力した、あるいは注意したアナリシスというのは必要なんじゃないかなと思います。

なかなか私も今まだベンチャーやっていますが、厳しいです。バイオ系は極めて厳しい。それから、上場しても大体100億円ぐらいしかならなくて、もうアメリカのVCは全く興味出してくれないというような状況であるので、やっぱり今後どうその辺の成長路線を狙っていくのかというのは戦略的に見た方がいいと思っています。

以上です。

○上山議員 ありがとうございます。

グローバルスタートアップキャンパスのテーマにも関係する話だなというようには思ってお聞きしました。

○篠原議員 今の菅議員のお話とも絡むんですが、11ページ目の話で、横を伸ばす支援というのはこれは支援だけではなくて、多分大学の先生方とか自治体の方々の努力によってこれってもう本当に十分行ってると思うんですよ。多分これから余り支援しなくてもこれって自然に増えていくと思うんです。

そういう観点では、この縦を伸ばす方をやっぱり単にどう頑張らせるかじゃなくて、政策的にどういうふうに支援していったらいいのか。それは海外からの投資を呼ぶことも大事なんですけど、やはりある程度公平にみんなを支援するというんじゃなくて、例えば分野を決めるとか、若しくはあるガイドラインを作ってこれを超えた会社だけを支援するとか、そんなような少し特例を作っていないと、この縦の伸びって多分できないと思います。

だから、この横の伸びがうまくいった延長線上で縦の伸びというのは多分無理だと思うので、そこはさっきおっしゃったアクセラレーションプログラムの運用かもしれませんが、ここは大胆に多分やられた方が、今の菅議員が色々なヒント出してくださっていると思うんですが、それをやられた方がいいんじゃないかなという意識は持ちました。

○上山議員 ありがとうございます。

有賀さんがおっしゃったみたいに、いわゆるパブリックプロキュアメントという政策、つまり最初のマーケットができていないときにベンチャーキャピタルの人たちもそこに入って来やすいような政策としては日本は弱いんだと思いますね。それは多分こういうこと、今おっしゃったようなことと関係するような気がいたします。

どうぞ。

○梶原議員 パブリックプロキュアメント、S B I R制度でそれを加速させると理解しています。今ステージ3は、まだこれからという段階なので、この先伸びていくと思っていたのですが、自治体だとまだまだそこまで行けてないということになるのですか。

○宇田川企画官 お答え申し上げます。

S B I R制度自体は国が、関係5省の御協力を頂いて、今フェーズ3プロジェクトを1年半動かしています。これは国が主導で社会実装の出口まできちんとしたロードマップを示すと、この5年間でですね。残り3.5年ですが、示すということルール化していますので、あまり自治体が、というところの関係性はございません。

ただ、国が必要であれば、例えば農水産物、ゲノム編集のスタートアップの方ですと、社会実装の推進のためには社会受容性の向上が重要になってくるわけで、そういった社会受容性を高めるために国が自治体に働きかけるという社会実装に向けた方策の検討もあり得ると思っています。

○上山議員 S B I Rもなかなかうまく進んで頑張ってくださいと思っています。

○菅議員 S B I Rについて一つ。私が見ている限り、結構中小企業にS B I Rのお金行っている場合もあって、例えば博士人材がいない企業で、グローバルに認められるイノベーションは起きないんですね。なので、そういう博士も誰もいないような企業にS B I Rを出すというのは、ある意味伸びの限界を見つつお金を出して助けてるというふうに見えるので、その辺のフィルターはしっかり付けた方がいいと思うんですね。例えば博士の学位を持っている人が一人、二人、三人といて、その中でその人たちがリーダーシップを取ってイノベーションをしていくんだという企業にはSBIRを出す、誰もいないんだったらそれは無理じゃないのという、そういうフィルターを付ける時期に来てると思います。

以上です

○上山議員 すごく重要な指摘だと思います。

第7期のときは、スモールアンドミディアムエンタープライズの話のことは重要になってく

るんじゃないかなと思ってはいますが、ここではお話ししません。

でも、SBIRそのものはすごく以前のものとは形が変わってうまく動いてるなど、最初の形としてはですが。

○大野経産大臣科学技術顧問 1点だけ是非お願いしたいのは、スタートアップがすごく増えて裾野が広がったわけですが、その分野がディープテックなのかそうじゃないのか、あるいはもう少し細かく分けて、そこを分析していただきたいなと思います。

大体この分野はこれぐらいかかるとか、あるいはここはもっとテコ入れしてあげないと、あるいはもっと早くに出口まで行けるはずなんだけど、どうしてこんなにかかっているのかということはそこから分かると思いますので、これだけたくさんのスタートアップができていますから、是非よろしくお願ひしたいと思います。

○上山議員 分野ごとの話、菅議員からもありましたが、分野ごとに相当このモジュールというか随分違うので、それは今後の分析の対象ということです。

よろしいでしょうか。

今回は公開でスタートアップ・エコシステム拠点都市の現在の状況と今後の方向性についての御意見いただく場を設けさせていただきました。

では、これでこのセッションは終わらせていただきます。

ありがとうございました。

○岩渕参事官 ありがとうございました。

午前10時50分 閉会